
ある老人の死

拓也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある老人の死

【Nコード】

N0178C

【作者名】

拓也

【あらすじ】

医師は殺人をしようとしていた。命はどれくらい重いのか。
前編。

前編

この患者は死ぬ。確実にだ。こういうことは病院ではよくあることだ。殊にここのような大学病院になるとだ。

目の前に、いかつい老人がいる。わたしが機械の電源を切ると、老人はいつの間にか死ぬ。そういう運命なのだ。

ぎりぎり生きている患者さん。あなたはそこまでして生きたいんですか？こんな質問にすら反応できない。あなたの生きてる理由って何？

老人は答えない。ただ口を結んで、目も閉じて。そうだよな。あなたはもう死ぬんだし。笑ってやった。もちろん看護師達に聞かないように。聞かれていたらどうなるか。

外には月は無かった。ただ、静寂が在るだけ。さて、どうするか。生命維持装置の電源を切れば、それで終わり。死亡診断書なら何とかなる。でも、非常用電源なんてものが付いていたら……。他だな。それか、空の注射器で……。それでいこう。

ゴミから拝借しようか。でも、あのゴミ箱はナースセンターにあったはずだ。よりによって、この展開か。いくら見回りがあるといつても、誰かしらいるものだ……。しかしである。私にはある考えがあった。この悪魔の発想はわたしを駆り立てた。少し高めの個人病室からゆつくりと深い闇に出た。恐れなんて微塵も無い。

ナースセンターの近くまで来た。廊下が暗くなっているからナースセンターはさながら橋の下にある屋台だ。不気味に明るい。そこには二人のナースがいた。一人は美しく、一人は醜い。その二人の会話を隠れながら聞いた。

「302の藤田さん。あの人、知ってるでしょう？セクハラひどいのよ。血圧計つてるとお尻触ってくるのよ！」醜い方が自信満々に、そしてさも迷惑そうに言った。「そうなんですか。私はやられたことなんてないですよ。」先輩を敬うように言ったが、嘘だ。本

当はこういふ話が一番嫌いなんだ。つくづく女は馬鹿げていると思う。醜い方は自信に満ちている。演技だと思うが。

「そういえば、315の加藤さん。そろそろですね。」そう言つて書類を先輩に渡す。「そうねえ。そろそろかしらねえ。」いかにも上から言つた。「あの人いつからあなんですか?」「カルテをみる限り、1ヶ月ね。」はちきれんばかりのナース姿が言つた。「まだ家族は諦めてないんですか?」「スラツとしたナースが言う。」「そろそろあきらめ時でしょう。」「もうこれ以上隠れる必要はなかった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0178c/>

ある老人の死

2011年1月20日03時11分発行